王畿「余氏家會籍題辭」訳注

―陽明門下の講会活動記録を読む（四）―

小路口　聡

はじめに

これまで、「陽明門下の講会活動記録を読む」と題して、王畿の講学活動における講会の記録を読んできたが、今回は、王畿の「余氏家會籍題辭」を取り上げる。これは、嘉靖三十六年（一五五七）に、徽州府の新安六邑の一つ婺源県沱川村の余氏一族が開いた所謂「家会」の「会籍」に記した題辞である。

またあわせて、同じく婺源県の葉氏一族が開いた「家会」について記した、錢德洪（一九四六～一五七四、浙江余姚の人）の「書婺源葉氏家會籍」も参考として取り上げる。

ともに、王陽明後学の講会講学活動の特色の一つとも言える、宗族の会としての「家会」という形態の講会活動の実態と、その思想史的意義について考察する際の、貴重な資料（哲学的資源）である。

徽州における「会」組織について

婺源を含む徽州地域における「会」と呼ばれるものの性質について、渋谷裕子氏は、そもそも「会」とは、「中国の伝統社会において、一定の人々が一定の共同活動を実施するために定期的に集まることを目的として結成された民間組織のこと」を言い、「明清期の徽州農村社会には、祭祀、金融、娯楽など様々な目的をもって組織された会が存在した」とした上で、そこに共通する「組織原理」として、

・「特定の責任者をおかないで会員全員が交替で運営責任者の任務につく」こと

・「運営方法は常に全員の合議制によって決められており、会員間に平等互恵の原則が貫かれている」こと

の二点を挙げる（以上、「徽州文書にみられる「会」組織について」『史学』慶応義塾大学三田史学会、巻六十七、一号、一九九七年九月、四五～七五頁）。この二点については、徽州府で開催された、陽明後学の講会活動にも、等しく当てはまる。

こうした風俗・伝統の下地の上に、陽明後学の学者たちを招聘して、一族の「家会」を開催することができたのであろう。後学たちも、また良知心学の地域拡大、庶民への普及浸透を目指して、積極的に参加していたようである。良知心学の特色は、なによりも、文字通り万人に開かれた学、すなわち、「天下の公学」（王陽明）であった。

徽州商人（徽商）と儒学教育

婺源を含む徽州府は、黄山のふもとに位置し、山地が全体の九割を占める。茶・木材・竹・墨の産地で有名だが、また、全国各地で活発な商業活動を行った徽商（新安商人）の故郷としても有名である。「徽商」は、別名「儒商」

と呼ばれるくらい、儒学、とりわけ、朱子学とは深い関わりを持っていた。

徽州は朱熹の郷里であり、「文献の国」あるいは「礼儀の邦」と称され、儒家の思想と道徳が重んじられていた。そのため、子弟の中に学術に秀でた者がいれば、一族でその学業を支援した。彼らは積極的に族譜の編纂を行ったが、族譜には朱熹の思想や道徳に則った「家訓」や「家規」が記されている。従って、徽州商人の商業経営は儒家、とりわけ朱熹の倫理規範の影響を強く受けるところとなった。（臼井佐知子『徽州商人の研究』汲古書院、二〇〇五、一五四頁）

また、当時の社会において、商人が、儒学を学ぶことの現実的な意味について、次のような指摘がある。

商人家を存続させるためには、巧みに政治権力者と接触することは重要な課題となる。徽商は安全保障と利益を得るため、政治権者との結びつきを極端に重視した。（徐曉筠「江戸期新興商人『三井家』の家存続の考え方――明清朝期の徽商との比較――」お茶の水大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書、二〇〇九、二五四頁、http://hdl.handle.net/10083/35355　2018/11/30）

そのための手段が、すなわち、儒学を学ぶことであり、端的に言えば、科挙において及第者を出すことであった。そのため、徽州府においては、一族の子弟の教育を目的とした学習会としての「家会」が、しきりに行われた。

陽明後学と徽州府の「家会」について

陽明後学の学者たちが参加した「家会」については、すでに、『語り合う〈良知〉たち』所収の拙論「王畿の良知心学と講学活動――嘉靖三十六年の「新安福田の会」を中心に――」の第三節「「家会」の誕生――良知心学の万山窮谷への浸透」において、あらましの述べている。以下の記述は、これに拠るものである。

銭明氏は、「陽明学の講会活動は、また宗族組織・血縁関係を団結の手段とするものでもあった」（「明代中晩期に吉安地区で展開された王学講会活動」、『哲学資源としての中国思想――吉田公平教授退休記念論集』、研文出版、二〇一三、二〇三頁）。と指摘しているが、とりわけ徽州は、有力な宗族が長期間にわたって安定的に続いた地域であった。銭緒山も、「書婺源葉氏家會籍」（本稿四十二頁以下に訳出）の中で、陽明学派の講会活動は、当初は、陽明門下の同志の会が始まりであったが、ここ近年は、有力氏族が、一族郎等の子弟を引き連れて、一家で行うようになった、と指摘している。「家会」本来の目的は、一族郎党の親睦和合と子弟の教育のために設立されたものであったが、王陽明の良知心学は、こうした「家会」を基盤にしながら、その参加者一人一人の性命（実存）の奥深くにまで入り込んでいくことを通して、しだいに地方に広がり、さらには、婺源のような山深い地方の、深山窮谷の村々にまで、深く浸透していったのである。

家会は、月に一回、明け方から日没まで行われ、その月の行い、すなわち、言行の善悪を、互いに吟味検証しあっていたようだ。本稿で訳出した「余氏家會籍題辞」の末尾では、その点について、次のように述べている。

吾人の學は、家庭に始まる。言行の善否、偽飾を容れず。二三君子、此に因りて自考自證し、徹底して澄湛して、以て餘滓を消さば、一家父子兄弟の法と為すに足らしむ。豈に徒だ、化、一家に行わるるのみならん。

ここに「自考自證」とあるように、王畿が「家会」参加者たちに求めたのは、各人が、是非善悪の判断を、自身で考え、身をもって明らかにし、そして、「自悟自戒」、自ら過ちに気付き、自ら改めることのできる、すなわち、自律的・主体的に「善」を実現することのできる実践主体として自立することであり、その上で、自ら手本となって一家を、さらには、一村一郡を、そして、最終的には、天下を風化することにあった。

テキストについて

王畿の「余氏家會籍題辭」は、『王龍渓先生全集』にも、呉震編校整理『王畿集』附録三「逸文輯佚」にも未収録のもので、今回も、これまで同様、韓夢鵬撰『新安理學先覺會言』（解光宇『新安理学論綱』安徽大学出版社、二〇一四）所収のものを底本とした。

また、錢緒山の「書婺源葉氏家會籍」についても、『徐愛・錢德洪・董澐集』（陽明後學文獻叢書、鳳凰出版、二〇〇七）に所載の「錢德洪語録詩文輯佚」には未所収である。やはり、『新安理學先覺會言』所収のものを使用した。

＊　＊　＊

王畿「余氏家會籍題辭」

婺源沱川余氏汝興・誠甫・孝甫等、謀於叔氏士晉、擧合族之會、以示親睦而徵德業、相與乞言于予、記有終也。

婺源沱川の余氏汝興・誠甫・孝甫等、叔氏士晉に謀り、合族の會を擧げて、以て親睦を示して德業を徵し、相與に言を予に乞う。記して終わり有るなり。

婺源県の沱川村の余汝興、余誠甫、余孝甫らは、余叔晉と話し合い、［一族の］親睦を示して德業を明らかにするために、一族をまとめる会を挙行し、そろって私に言葉を求めてきた。記して結びとするのである。

○**婺源沱川余氏**＝沱川郷篁村の余氏。余氏の宗祠は、明永楽年間（一四〇三～一四二四年）に建造され、その堂の号を余慶堂と言う。参考までに、WEB上の「維基百科」、及び、「互動百科」には、現存する「婺源宗祠」の写真が多数掲載されている。この篁村余氏宗祠（余慶堂、永楽年間建造）を含む、陽春方氏宗祠、汪口**俞**氏宗祠、黄村経義堂、洪村光裕堂、西冲敦倫堂、豸峰成義堂の七箇所は、徽州建筑中の典型的な代表として、二〇〇六年、全国重点文物保護**単**位に選ばれている（以上、「維基百家（https://zh.wikipedia.org/wiki/2018/11/30取得）」の「婺源宗祠」の頁に拠る）。　○**余氏汝興**＝康熙『徽州府志』巻十・歳貢・婺源縣學に、「余

希傑、字汝興、沱川人。嘉祥教諭。」とある（清・丁廷楗修／趙吉士纂《（康熙）徽州府志十八巻》清康熙三十八年刊本）。　○**誠甫**＝未詳。　○**孝甫**＝康熙『徽州府志』巻十五・績學に、「余純似、字孝甫。婺源沱川人。從鄒東廓遊、復受曆學於**呂**巾石、受知督學耿定向領袖。紫陽諸生、其言行一本中庸。居**鄉**不爲名高、惟務發明止學、遠近學者、宗之、稱宏齋先生。」（同上とある。）　○**叔氏士晉**＝康熙『徽州府志』巻十一・選挙志丁・舍選の婺源縣の項に、「余康元、字叔晉。沱川人靖州。州同知。」とある（同上）。

予惟、君子之學、不外于倫理。倫理以厚為道、而化裁之機、在篤恩義以聯之。家庭之間、恩常掩義。恩洽而済之以義、則恩不瀆義。敷而培之以恩、則義不乖。恩義並用、先後以節、正家之道也。然此非可以聲音笑貌襲取而得。其本在于自反。而日可見之行、係于言行之常。孔子曰、「所求乎子、以事父、未能、所求乎弟以事兄、未能。」汲汲有事于庸言庸行、以求盡君子之道。此孔氏家法也。易家人大象曰、「風自火出、家人。君子以言有物、而行有恒。」風自火出、動有所由。象之示人顕矣。夫言而有物、則非虚誣之言、行而有恒、則非邪妄之行。言非虚誣、家人得有所稽、行非邪妄、家人得有所頼。風動之機、于己取之而已。故曰、「威如之、吉。反身之謂也。」且一家之中、父子兄弟之間、不能以皆善、則不能無過。惟在二三主會君子、積誠以感動之。誠意有餘、而規過之言、常若不足、俾之自悟自改、又須與之同過、不至潔己大峻以彰父兄之失、既不傷恩亦不廢義、自處以厚倫理、始從而敦。此風自火出之象也。昔人嘗以忍字為同居之本。能忍固善。然一家之中、情各不斉、情有所拂、則氣不平。氣不能平、則情易乖。雖使強忍、亦非可久之道。惟在二三主會君子、默体以通其志、使之情和氣暢、恩義周流、不待忍而自消、于倫理尤為有補耳。

予惟えらく、君子の學は、倫理に外ならず。倫理は、厚きを以て道と為す。而して、化裁の機は、恩義を篤くして之に聯なるに在り。家庭の間、恩は常に義を掩う。恩洽くして、之を済うに義を以てせば、則ち、恩、義を瀆さず。敷して之を培うに恩を以てせば、則ち、義乖かず。恩義並び用い、先後するに節を以てす、正家の道なり。然れども、此れ聲音笑貌を以て襲取して得べきに非ず。其の本は、自反するに在り。而して、日に之を行に見すべし、言行の常に係わる。孔子曰く、「子に求むる所は、以て父に事う。未だ能わず。弟に求むる所は、以て兄に事う。未だ能わず」と。汲汲して、庸言庸行を事として、以て君子の道を盡くさんことを求むる有り。此れ孔氏の家法なり。易の家人の大象に曰く、「風、火より出づるは、家人。君子、以て言に物有りて、行に恒有り」と。風は火より出づ、動くに由る所有り。象の人に示すや、顕らけし。夫れ言いて物有れば、則ち、虚誣の言に非ず、行いて恒有れば、則ち、邪妄の行に非ず。言、虚誣に非ざれば、家人、稽える所有るを得、行い、邪妄に非ざれば、家人、頼る所有るを得。風動の機、己に于いて之を取るのみ。故に曰く、「威如たるの吉とは、身に反るの謂なり」と。且つ一家の中、父子兄弟の間、以て皆な善なること能わざれば、則ち、過ち無き能わず。惟だ二三の主會の君子に在りては、誠を積みて以て之を感動せしむ。誠意、餘有りて、過ちを規すの言、常に足らざるが若くし、之をして自悟自改せしめ、又た、須らく之れと過ちを同じくすべくして、己を潔め大峻して以て父兄の失を彰らかにするに至らざらしむ。既に恩を傷なわず、亦た、義を廢せず、自ら處して以て倫理を厚くして、始めて從りて敦し。此れ風、火より出づるの象なり。昔人、嘗て忍の字を以て同居の本と為す。能く忍ぶは固より善なり。然れども、一家の中、情、各おの斉しからず、情に拂る所有れば、則ち、氣、平らかならず。氣、平らかなる能わざれば、則ち、情は乖き易し。強忍せしむと雖も、亦た久しくすべきの道に非ず。惟だ二三の主會君子に在りては、默体して以て其の志を通じ、之をして情和氣暢、恩義周流ならしむれば、忍を待たずして自ずから消ぜん。倫理に于いて、尤も

補い有りと為すのみ。

私が考えますに、君子の学は、倫理（人倫の道）に外ならない。倫理を実践する方法としては、手厚くするのが第一である。そして、化裁（家庭教育）の機軸は、恩義を篤くして、協力し合うことにある。家庭の中では、恩愛の情が常に義を上回ってしまいがちである。恩愛の情を広く行きわたらせ、義によって［行き過ぎた恩愛の情を］整えてやれば、恩が義を傷なうことはない。あまねく行き渡らせて、恩愛の情によって培っていけば、義に背くことはない。恩と義とを合わせ用いて、節度をもって、その優先順位を決めることが、家を正す正しいやり方である。けれども、この点に関しては、声色や笑顔によって上辺だけ取り繕うことで、うまくゆくものではない。その根本は、我が身に反省することにある。そして、日々、これを行為の上に具現すべきであり、（そのためには）言葉と実践とが一定していることが大切だ。孔子も、「子どもにもこうして欲しいと思う気持ちで、父親に仕えること、それが私にはまだできない。弟にもこうして欲しいと思う気持ちで、兄に仕えること、それが私にはまだできない」と言っている。常に怠ることなく、日々の発言と振る舞いに真摯に向き合うことで、君子の道を尽くすことを求めたのである。これが孔子のやり方であった。『易』家人の卦の象伝に、「風が火から出るのが家人である。君子は、言葉は必ず事実に基づき、行動は常に一定であるように心がけよ」とある。風は火から生まれる（火が燃えると風が起こる）、動くには、それなりの理由があるのだ。［易の］象が人に示していることは明白だ。そもそも言葉が事実に基づいていれば、根拠の無い戯言ではないし、行動に一貫性があれば、邪妄な行動ではない。言葉が根拠の無い戯言でなければ、家人は参考にすることができるし、行動が邪妄でなければ、家人は信頼することができる。風化の機は、己から始まるものなのだ。それ故、［家人の上九の象伝にも］「威厳さがもたらす吉とは、身に反ること

から始めるという意味である」と言うのである。のみならず、一家の内、父子兄弟の間でも、皆が皆、善であるということは不可能なので、過ちが無いということはあり得ない。ほかでもない、家会を主導する諸君子にあっては、自ら誠を積んで、一族を感化するのである。あふれんばかりの誠意と、過ちを規正する言葉を、常に、それでもまだ足りないと言わんばかりに尽くし、一族の者たちに、自ら気づかせ、自ら改めさせて、必ず過失を共有して、わが身を整え、大いに厳しく戒めて、父兄の落ち度を露呈させてしまわないようにする。恩を損なわない上に、同時に、義を捨てることもなく、我が身を処して、倫理（人倫の道）を手厚く実践し、そこから始めて、よりいっそう手厚さを加えていくのである。これが、風が火から生まれるという象である。昔の人は、かつては「忍」の一字を、家庭生活［を営んでいく上で］の基本とした。我慢することができるのは、もとより善いことである。しかしながら、一家の中で、心情はおのおの異なるので、心情に逆らうことがあれば、［家庭内の］雰囲気は平穏ではなくなる。［家庭内の］雰囲気が平穏を保つことができないと、心情は反発し易い。無理に我慢させたとしても、やはり、長続きするやり方ではない。ほかでもない、家会を主導する諸君子にあっては、言葉にばかり頼らず、身をもって理解し、その思いを通わせ、互いに心情を調和させ、気を伸びやかにして、恩義を周流させれば、［ことさらに］「忍」の一字に頼らなくても、自然と解消するだろう。倫理において、もっとも助けとなるはずだ。

○**倫理**＝人倫の道。すなわち、父子の親、夫婦の義、長幼の序を言う。下に引く、『程氏易伝』の家人の伝を参照。　○**化裁**＝『易』繫辭上伝に、「是故形而上者謂之道、形而下者謂之器、化而裁之謂之變。」とある。事物の変化にもとづいて、物事を適切に切り取る（処理・処置する）ことを言う。ここは、時機にかなった、適切な教育を施すことを言うのであろう。　○**篤恩義**＝程伊川『程氏易伝』家人の卦辞の伝に、「家人者、家内

之道、父子之親、夫婦之義、尊卑長幼之序、正倫理、篤恩義、家人之道也」とある。『近思録』家道篇に引く。『朱子語類』巻第七十二・易八に、「或問、「易傳云、正家之道在於『正倫理、篤恩義』。今欲正倫理、則有傷恩義。欲篤恩義、又有乖於倫理、如何。」曰、「須是於正倫理處篤恩義、篤恩義而不失倫理、方可。」（理学叢書本一八二九頁）。　○**襲取**＝『孟子』公孫丑上篇に、「其爲氣也、配義與道。無是餒也。是集義所生者、非義襲而取之也。行有不慊於心、則餒矣。」とある。その朱注に、「言氣雖可以配乎道義、而其養之之始、乃由事皆合義、自反常直、是以無所愧怍、而此氣自然發生於中。非由只行一事、偶合於義、便可掩襲於外而得之也。慊、快也。足也。」とある。　○**自反**＝前引の『孟子』の朱注にも見える。自分自身を反省すること。王畿の「一念自反」の思想を参照。拙論「王畿の「一念自反」の思想――王畿良知心学原論（二）――」『東洋大学中国哲学文学科紀要』第19号　二〇一一）参照。　○**日可見之行**＝『易』乾卦文言伝の語。　○**孔子曰、所求乎子**～＝『中庸章句』第一三章に、「君子之道四。丘未能一焉。所求乎子、以事父、未能也。所求乎臣、以事君、未能也。所求乎弟、以事兄、未能也。所求乎朋友、先施之、未能也。庸德之行、庸言之謹、有所不足、不敢不勉、有餘不敢盡。言顧行、行顧言。君子胡不慥慥爾。」朱注に、「求、猶責也。道不遠人。凡己之所以責人者、皆道之所當然也。故反之以自責而自脩焉。」とある。　○**庸言庸行**＝『易』乾卦文言伝に、「九二曰、見龍在田、利見大人、何謂也。子曰、龍德而正中者也。庸言之信、庸行之謹、閑邪存其誠、善世而不伐、德博而化。易曰、見龍在田、利見大人、君德也。」本義に、「常言亦信、常行亦謹、盛德之至也。閑邪存其誠、无斁亦保之意。」　○**風自火出**～＝『易』家人卦の象伝の語。　○**象之示人顯**＝家人の卦の象は、☲☴離下巽上。　○**風動**＝『書経』大禹謨に、「帝曰、俾予從欲以治、四方風動、惟乃之休。」と見える。集伝に、「民法を犯さずして、上刑を用いざる者は、舜の欲する所なり。汝、能く我をして願い欲する所の如くにして以て治めしむれば、教化四

達し、風の鼓動するが如く、靡然たらざる莫し。是れ乃ち汝の美なり」とある。　○**風動之機、于己取之而已**＝やはり、孔子の「家風」とも言うべき、「爲仁由己」（『論語』顔淵篇）を踏まえるのであろう。朱注に、「爲仁由己、而非他人所能預、又見其機之在我而無難也」とある。　○**威如之～**＝家人の卦の上九の象伝の語。朱子の本義に、「謂非作威也。反身自治、則人畏服之矣。」と。　○**同過**＝用例として、『菜根譚』前集に、「當與人同過。不當與人同功。同功則相忌。可與人共患難。不可與人共安樂。安樂則相仇。」とある。　○**潔己**＝『論語』述而篇に、「人潔己以進、與其潔也。不保其往也。」とある。朱注に、「潔、脩治也」　○**自處以厚倫理、始從而敦**＝『中庸』の「敦厚以崇禮」を踏まえたものとして解釈した。朱注に、「敦、加厚也。」とした上で、「敦篤乎其所已能。」と言う。　○**默体**＝「默す」、すなわち、言語を媒介とした分析的・対象的理解ではなく、「体す」、すなわち、主体的実践を通して、体験的に理解すること。『程氏遺書』巻一六に、「學者要默體天地之化。」（『二程遺書』巻一五　理学叢書『二程集』一四八頁）とある。

吾人之學、始于家庭、言行善否、不容偽飾。二三君子、因此自考自證、徹底澄湛、以消餘滓、使足為一家父子兄弟之法。豈徒化行于一家。德將日崇、業將日廣。此學之日充日顯、由一家以達于一邑一郡、以風動于四方、亦將于二三君子有深頼焉。凡父兄子弟、亦望相與協賛、以圖其終、固吾道之幸也。復書以遺之。

吾人の學は、家庭に始まる。言行の善否、偽飾を容れず。二三君子、此に因りて自ら考え自ら證し、徹底澄湛して、以て餘滓を消さば、一家父子兄弟の法と為すに足らしむ。豈に徒だ化、一家に行わるるのみならん。德は將に日び崇まらんとし、業は將に日に廣まらんとす。此の學の日び充ち、日び顯らかなれば、一家由りして、以て一邑一郡

に達し、以て四方を風動す、亦た将に二三の君子に于いて深く頼むこと有り。凡そ父兄子弟、亦た、相與に協賛して以て其の終わりを圖らんことを望まん。固に吾が道の幸いなり。復書して以て之を遺る。

われわれの学びは、家庭に始まる。言行が善であるか否か、偽飾(ごまかし)はきかない。二三君子(あなたたち)は、これによって自分自身で考え、身をもって明らかにして、徹底して心を澄ませ静め、［良知の実現を阻害する］余分な渣滓(かす)を消し去ったならば、一家父子兄弟の法るべき手本となすことができる。［そうなると］どうして、単に、その教化が一家に行われるだけで止まろうか。 徳業は日ごとに崇(たか)まり、日ごとに広まるだろう。この学が日ごとに充実して、日ごとに顕著になっていけば、一家から一邑一郡にまでゆきわたり、四方を風動するようになるであろう。これもまた、二三君子(きみたち)に深く期待するところである。父兄子弟が、さらに共に力を合わせ、助け合って、その行きつく未来を思い描くことを望む。［実現できれば］まことに吾が道の幸いである。返書にて、これを贈る。

嘉靖丁巳仲夏上浣　龍溪王畿書

嘉靖三十六年（一五五七）五月上旬　龍溪王畿書す

○**餘滓**＝余分な渣滓。良知の実現を阻害する要因。その代表的なものが「物欲」と「意見」である。これについては、すでに陸九淵が喝破していた。「愚不肖之蔽在於物欲、賢者智者之蔽在於意見。高下汚潔雖不同、其爲蔽理溺心而不得其正、則一也。（「与鄧文範第一書」『陸九淵集』巻二　一一頁）。　○**徳将日崇、業将日廣**＝『易』繫辞伝に、「子曰、易其至矣乎。夫易、聖人所以崇德而廣業也。」とあるのを踏まえる。　○**圖其終**＝その行く

末を案じる。『春秋左氏伝』昭公五年に、「公室四分、民食於他、思莫在公、不圖其終」杜預の注に、「無爲公謀終始者」とある。　○**嘉靖丁巳**＝嘉靖三十六年。一五五七年。王畿六〇歲。この年、王畿は、四月には寧国の水西の会、五月には婺源の星源の会、五月に福建の三山の会、新安の福田の会に赴くなど、旺盛に講学活動を行っている。この点については、拙論「王畿の良知心学と講学活動――嘉靖三十六年の「新安福田の会」を中心に――」を参照。

＊　＊　＊

錢緒山「書婺源葉氏家會籍」

自吾師倡學、而天下始有同志之會。始會於師門、既會於四方。邇年以來、各率族黨子弟、以會於家。夫道始於家邦、終於四海、三代之常也。絶學難興、應志而起者、非超世特立、不可得。故始會於師門、尚寥寥也。會於四方、則信孚者博無擇地矣。會於家庭、則信孚者益博無擇人矣。周子曰「家難而天下易。」學徵於日用、難者既孚、而易者自不容已焉、得道之常也。

吾が師、學を倡えてより、天下、始めて同志の會有り。始めは師門に會し、既にして四方に會す。邇年以來、各おの族黨の子弟を率いて、以て家に會す。夫れ道は家邦に始まり、四海に終うるは、三代の常なり。絶學は興し難し。志に應じて起つ者は、超世特立に非ざれば、得べからず。故に、始め師門に會するものは、尚お寥寥たるなり。四

方に會すれば、則ち、信孚なる者、地を擇ぶ無きを慱(うれ)う。家庭に會すれば、則ち、信孚なる者は益ます人を擇ぶ無きを慱う。周子曰く、「家は難くして、天下は易し」と。學は日用に徵す、難しとは既に孚なればなり、而して、易しとは自ずから已む容からざればなり。道を得るの常なり。

吾が師（王陽明）が〔良知の〕学を唱えてからというもの、天下にはじめて同志の会が生まれた。はじめのうちは、師の門下で講会を行っていただけだったが、やがて四方で講会を開くようになった。近年は、それぞれの一族郎党が子弟を引き連れて、一家で講会を開くようになった。そもそも道は、家［を斉え］国［を治める］に始まり、四海に［広がって］終わるのは、三代の常である。絶学を復興することは難しい。志に呼応して興起することは、俗世を越えて自立できる者でなければ、困難である。それ故、はじめに師門で講会したものたちは、やはり孤独であった。四方で講会しようとするとき、真摯に学ぼうとする者たちは、適切な場所が無いことを憂慮した。家庭で講会するときは、真摯に学ぼうとする者たちは、ますます適切な人材がいないことを憂慮した。周子も、「家は治め難いが、天下は治め易い」と言っている。学は日常生活の場において、その成果を検証する。「難しい」と［言うの］は、誠実なるが故であり、一方で、「易しい」と［言うの］は、自ずと已むに已まれぬもの［すなわち、道］に順うからである。道をつかみとるための常道である。

○**夫道始於家邦**＝「家邦」は、『詩経』大雅・文王之什・思齊に、「刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦」と見える。朱熹の集伝に、「其儀法、内施於閨門、而至于兄弟、以御于家邦也。孔子曰、家齊而後國治。」とある。

○**慱**＝憂慮する。『詩経』檜風に、「勞心慱慱兮」と見える。朱熹の集伝に、「慱慱、憂勞之貌。」とある。　○

周子曰家難而天下易＝周濂溪『通書』家人・睽・復・無妄第三十二「治天下有本、身之謂也。治天下有則、家之謂也。本必端。端本誠心而已矣。則必善。善則和親而已矣。家難而天下易。家親而天下疏也。（天下を治むるに本有り、身の謂なり。天下を治むるに則有り、家の謂なり。本は必ず端しくす。本を端しくするは心を誠にするのみ。則は必ず善くす。則を善くするは親を和するのみ。家は難くして天下は易し。家は親しくして天下は疏ければなり）。」

余自水西赴婺源福山。會福山者覺山諸君子、合六邑同志之會也。葉生茂芝、率其家會弟子、邀予于家。予見其童叟咸集、靄靄然和氣之相襲焉、彬彬然德讓之相宣焉。婺源當萬山之中、而葉氏居窮谷之邃、年來世發顯科、而子弟又賢且衆多。浸浸于道若此。喜同志之會、不擇于窮谷、斯道之慶也。

余、水西より婺源福山に赴く。福山に會する者、覺山諸君子、六邑同志を合するの會なり。葉生茂芝、其の家會の弟子を率いて、予を家に邀う。予、其の童叟咸な集まり、靄靄然として和氣の相襲い、彬彬然として德讓の相宣ぶるを見る。婺源、萬山の中に當たりて、葉氏は窮谷の邃に居る。年來、世よ顯科を發して、子弟、又た賢にして、且つ、衆多なり。道に浸浸たること此の若し。同志の會、窮谷を擇ばざるを喜ぶ。斯道の慶びなり。

私は、水西［の会］より婺源の福山に赴いた。福山に集まった者たちは、洪覺山ら諸君子たちで、六邑の同志たちを統合する講会である。葉茂芝君が、その家会の弟子たちを引き連れて、私を［葉氏の］家会に迎えてくれた。私は、子供から老人まで、男たちが皆な集まり、和気藹々とした雰囲気に包まれ、文雅と質朴さとがうまくとけあい、

謙譲の美徳があまなく行き渡っているさまを目の当たりにした。婺源は、深い山懐に位置し、葉氏一族は窮谷の更に奥まったところに住んでいる。ここ数年来、代々、科挙の合格者を出しており、子弟たちは優秀な上に、その数も多い。このように道はしだいに浸透している。同志の会も、山間の窮谷［のような僻地］にさえも分け隔てなく広まっていることは喜ばしいことだ。この道にとって慶賀すべきことである。

○**水西**＝寧国府涇県にあった水西で行われた講会のこと。佐野公治氏は、「水西書院は王畿講学の一大拠点であった」（明代嘉靖年間の講学活動―陽明学派の講学―」『陽明学』第16号　二〇〇四　九頁）という。また、中純夫氏の「王畿の講学活動」には、「王畿が水西の会に赴いたことが少なくとも記録上で確認されるのは、……嘉靖二十八年を始めとして、三十二年、三十四年、三十六年、三十七年、四十三年、万暦五年である。」（四六一頁）とある。嘉靖二十八の水西の会については、王畿の「水西會約題詞」を参照（『龍渓会語』巻一所収）。そこに、「歳以春秋為期、蘄余與緒山子迭至、以求相觀之益」とあるように、年に二回、春と秋に開催し、王畿と銭德洪とが代わる代わる主講となって行われていた。　○**婺源**＝婺源県は、中国江西省東北部、安徽省と浙江省との境界に位置する。上饒市所轄の一県である。婺源県は、古くは徽州府所轄の六県の一つであった。詳細は、本誌第七十集に掲載した、「王畿「婺源同志會約」訳注――陽明門下の講会活動記録を読む（二）――」の解説「開催地の婺源について」を参照。　○**福山**＝「安徽婺源縣の西南四十五里に在り。又の名を太山という。左に總靈洞がある。明の湛若水が嘗てここで講學した」（臧勵龢等編『中國古今地名大辭典』商務印書館　一九三一）。湛甘泉の「福山臨講學習章旨」に、「今婺源同志諸君、共立福山書院爲講習之地。」とある（『新安理學先覺會言』巻之二）。また、嘉靖『徽州府志』巻九・学校・婺源県福山精舎の条に拠れば、福山精舎は、

婺源県の南四十五里に位置する。明の嘉靖年間、湛甘泉、および、その門人方純仁らが、その地で講学を行い、山地を贖い、邑令の呉轅に、精舎を剛柔二山の中の福山寺の側に建設することを請願し、書院十間と素心亭を洗心地の辺に建設し、膳田若干畝を持つという。新安六邑の講学の場であり、湛甘泉の肖像がある。門人の洪垣に「記」が、安福の劉邦采に「會記」がある。湛若水「福山素心亭詩序」に、「婺源福山之勝、……有泉曰洗心泉。方生純仁及瓘與諸同志治之爲講學之地。泉上有亭、予名之曰洗心亭。」とあり、また、清人田化『重建福山書院記』に、「去邑一舍地而遥曰中云、又有所謂福山書院者。福山初辟爲釋氏居、前明増城湛氏甘泉道経婺南、從游者延致聚講其地、書院始得名。」とある（以上、陳時龍 二八七頁）。　○**覺山**＝洪垣、字は峻之、号は覚山、婺源の人。一五〇一～一五九〇。嘉靖十一年の進士で温州知府を以て落職帰郷し、以來家居すること四十六年。その間、婺源を中心に、新安（徽州府）での講会活動を精力的に行っている。徽州府における陽明学派の講会を誘致するにあたっての中心的存在であった。九十歳で卒した。湛甘泉の高弟で、「湛甘泉先生文集序」（『湛甘泉先生文集』広西師範大学出版社、二〇一四、四七頁）、及び、「墓誌銘」（同上・巻三十二・外集所収、一八七五頁）がある。『明史』巻二百八、『明儒学案』巻三十九に伝がある。　○**六邑同志之會**＝新安六邑（婺源・歙・祁門・休寧・黟・績溪）全体では年一回の「歳会」が行われた。これが「新安六邑同志会」。また、各邑では三ヶ月に一回の「季会」が行われ、更には、裕福な氏族では子弟の教育として月一回の「月会」も行われていた。所謂「家会」である。　○**葉生茂芝**＝葉茂芝、字德和。父の名は蓮峰、弟は獻芝。兄弟ともに、王畿に従学。解説にも記したように、王畿も、葉茂芝・獻芝兄弟の招きで、葉氏一族の家会（「進修会」）には招聘されていた。その時の記録が「書進修会籍」『王畿集』巻二、四八頁）である。以上の記述は、これに拠る。参考までに、該当箇所を巻末に訳出しておいた。康熙『徽州府志』巻十五・隠逸伝・績學に伝有り。

○童叟＝童は未成年の子供。叟は年老いた男。

明日諸生稽顙懇乞一言、以規會籍。予進而語之曰、二三子、爾知會之爲義矣乎。知同志之會在家族、而不知自求會之端、其會也誣。天有二氣五運、會而爲人、人有五類四體七竅、會而爲心、心之神明、靈觸靈通、主宰造化、綱紀百物、散爲萬殊、歸而爲一、心也者、萬理之會也。故心一則神明察、而萬理時出、心二則神明蔽塞、萬理乖隔。會也者、以求自一其心也。一其心者、自得其所會也。自得其所會、會之實也。人人皆得其所會焉、會之成也。『易』曰「觀其會通、以行其典禮」、知會則知通矣。是故、心二求會、以自一也。心疑求會、以自明也。心散求會、以自凝也。一其心亦以懲人之二也。明其心亦以開人之疑也。凝聚吾心之精神、亦以萃夫人之渙散也。得其會而物我皆通、會之成也。不知會者、反是奸其會之名而不思、其實自欺也。襲其會之始而不思、要其成自誣也。既欺且誣、人亦以誣欺應之。行于妻子且不能、而況于家乎。而況于天下乎。二三子識之。

明日、諸生、稽顙(けいそう)して懇(ねんご)ろに一言を乞いて、以て會籍を規(はか)らんとす。予進みて之に語りて曰く、「二三子、爾(なんじ)、會の義爲るを知るや。同志の會、家族に在るを知るも、自ら會を求むるの端を知らざれば、其の會や誣なり。天に二氣五運有り、會して人と爲る。人に五類四體七竅有り、會して心と爲る。心の神明、靈觸れれば靈通じ、造化を主宰し、百物を綱紀し、散じて萬殊と爲り、歸して一と爲す。心なる者は、萬理の會なり。故に、心一なれば則ち神明察(あき)らかにして、萬理時に出づ。心二なれば則ち神明蔽塞し、萬理乖隔す。會なる者、以て自ら其の心を一にせんことを求むるなり。其の心を一にすとは、自ら其の會する所を得るなり。自ら其の會する所を得るは、會の實なり。人人、皆な其の會する所を得るは、會の成るなり。『易』に曰く、「其の會通するを觀て、以て其の典禮を行う」と。

會を知れば則ち通を知る。是れ故に、心二なるも、會するを求めて、以て自ずから一なり。心疑うも、會するを求めて、以て自ずから明らかなり。心散ずるも、會するを求めて、以て自ずから凝るなり。其の心を一にして、亦た以て人の二なるを懲らすなり。其の心を明らかにして、亦た、以て人の疑いを開くなり。吾が心の精神を凝聚し、亦た以て夫の人の渙散を萃むるなり。其の會を得て、物我皆な通ず、會の成るなり。會を知らざる者は、反て是れ其の會の名を奸して思わず、其れ實に自ら欺くなり。其の會の始めを襲いて思わざるは、其の自らを誣いるを成すを要むるなり。既に欺むき、且つ誣う、人、亦た誣欺を以て之に應ず。妻子に行うも、且つ能わず、而るに況んや家に于いてをや。而るに、況んや天下に于いてをや。二三子、之を識せ。

明くる朝、諸生が、地に額をつけて拝礼をし、会籍（家会の規約・名簿）を締め括るために、「一言、お言葉を」と、懇願してきた。私は進んで、次のように語った。「二三子、あなたたちは、『会』の原義をご存知ですか。［聖人を目指そうとする］志を同じくする者たちの会が、家族でも行われていることを知ってはいても、何故、自ら集まろうとするのかという、その動機が分かっていなければ、その会は［形だけの］偽物です。天には二気五行が存在するが、それが集まって人になる。人には、五類・四体・七竅があるが、それらが集まって心となります。神明なる心が［外物に］触れれば通じる［感応のはたらき］は、霊（不可思議）なるものであり、造化（天地の生成のはたらき）をつかさどり、万物を統治します。［万物は］多種多様な存在として世界に散在しているが、根源に復帰して一つになります。心というものは、万理が集結するところです。それ故、心が一つになれば、神明［なるはたらき］は顕著にして、万理は随時に現出します。心が［道心／人心、天理／人欲の］二つ［に引き裂かれたままであった］ならば、心の神明なるはたらきは蔽塞し、万理は互いに乖離間隔します。会というものは、［集まることで］

心を一つにすることを求めるものです。心を一にするというのは、万理が会集するところを手に入れることです。自分自身の中に万理が会集（一点に集中）するところをつかみとるということが、この会の実践です。［会聚する］人々全員が、［万理が］会集ところをつかみとるということが、会の完成である。『易』繫辞上伝に、「［聖人は、天下の事物の変動を見て、］そのあい集まり、あい分かれる変化のさまを観察して、その中に典礼（一定の規範・準則）を遂行する」とあります。『会』［の意味］が分かれば、『通ずる』［とはどういうことか］が分かります。そのため、心が二つに分裂していても、会する（一つに集める）ことを求めたならば、自ずと一つにまとまります。心が疑っていても、会することを求めたならば、自ずと明らかになります。心が散漫になっていても、会することを求めれば、自ずと［心は］集中します。自身の心を一つにすることで、また他人の二つに分裂した心を戒めるのです。自身の心を明らかにすることで、また他人の疑念を除くのです。吾が心の精神（ちから）を一つに凝聚し、それによって、また人々のバラバラになった心を一つにまとめるのです。そうやって会することができれば、物我（自己と他者）はいずれも通じあい、『会（まとまり）』が成就します。『会』［の意味］を知らない者は、かえってその『会』の名を侵犯し、その実際の中身（内面）を自ら欺いてしまいます。その『会』の始めを、欺瞞で塗り固めて、［その不正についても］考えないのは、最後まで他人を欺こうとすることです。自分自身をあざむいている上に、さらに他人をだましているのであって、［そうなると］他人もやはり、あざむき、だますというやり方で応じることになります。妻子に行うことすらできないとすれば、ましてや、家族に対してはなおさらです。ましてや、天下に対しては言うまでもありません。二三子、よく心することです。

○稽顙＝ひたいを地面につけて敬礼すること。ぬかづく。「稽首」とも言う。「九拝」のうち、最も重い敬礼。『周

礼』春官・宗伯下に、「辨九拜、曰稽首、二曰頓首、三曰空首、四曰振動、五曰吉拜、六曰凶拜、七曰奇拜、八曰褒拜、九曰肅拜、以享右祭祀。」注に「稽首、拜頭至地也」、疏に「一曰稽首、其稽稽留之字。頭至地多時則為稽首也。此三者正拜也。稽首、拜中最重、臣拜君之拜」とある。　○**不知自求會之端**＝人から強制されたものでもなく、自分自身の内側からの切実なる要求として「会（集まる）」ことを求める心情がわき起こってくる、そうした無意識の欲求、すなわち、動機（原文「端」）の由来、その意義を知らないということ。「端」は、孟子の「四端」の「端」を踏まえる。　○**五類**＝未詳。五臓（心・腎・肺・肝・脾）。もしくは、五情（喜・怒・愛・悪・怨）か。　○**四体**＝両手両足。四肢。人の身体を言う。　○**七竅**＝口鼻耳眼の七つの竅（あな）、すなわち、感覚器官を指す。『荘子』の渾沌説話に見える。○**心之神明**＝朱熹『大学或問』に、「若夫知則心之神明、妙衆理而宰萬物者也。」とある。「神明」とは、心の優れた働きの形容する語。「神」とは、目にも止まらぬ素早い感応を、「明」とは是非善悪の判断、道理の洞察に明るいことを言う。　○**靈觸靈通**＝「觸通」すなわち「感応」と同意であろう。例えば、王畿に次のような発言がある。「先師良知之説仿於孟子、不學不慮、乃天所爲、自然之良知也。惟其自然之良、不待學慮、故愛親敬兄、觸機而発、神感神応。惟其觸機而發、神感神應、然後爲不學不慮自然之良也。……」（「致知議辯」『王畿集』巻六　一三七頁）と。また、「若是真致良知、只宜虚心應物、使人人各得尽其情、能剛能柔、觸機而応、迎刃而解、更無些子攙入。譬之明鏡當臺、妍媸自辨、方是経綸手段、纔有些子才智伎倆與之相形、自己光明反爲所蔽。……」（「維揚晤語」同巻一　八頁）とあり、また、「精神不凝聚則不能成事。今欲凝聚精神、更無巧法、只是將一切閒浪費精神、徹底勿留些子、盡與蕩滌、全体完復在此、觸機而応、事無不成。是謂『溥博淵泉而時出之』。故曰、『心之精神謂之聖』。」（「撫州擬峴台会語」二四頁）とある。「触機而発」「触機而応」など。その「感応」が「霊」であること。　○**心一則神明察、而萬**

理時出＝『伝習録』に、「虚霊不昧、衆理具而萬事出。心外無理。心外無事。」とあるのを踏まえる。　○**會也者**～＝解説参照。　○**易曰觀其會通**～＝『易』繫辞上伝に、「聖人有以見天下之動、而觀其會通、以行其典禮、繫辭焉以斷其吉凶。是故謂之爻。」とある。　○**知會則知通矣**＝ちなみに朱熹の解釈は、その本義に曰く、「會、謂理之所聚而不可遺處。通、謂理之可行而无所礙處。如庖丁解牛。會則其族、而通則其虚也。」と。

明日師泉劉子會合于福山、會畢、茂芝持會籍請書、乃書而歸志。

明日、師泉劉子、福山に會合す。會畢わり、茂芝、會籍を持ちて書を請う。乃ち書して歸志あり。

明くる日、劉師泉さんと、福山で落ち合った。講会が終わり、葉茂芝が会籍を持ってきて、［私にも］何か書いて下さいと言う。そこで、［この文を］認めて帰ろうと思う。

○**師泉劉子**＝劉師泉、字は邦采、号は君亮・獅泉。江西安福の人。嘉靖七年の郷試。『明儒学案』巻十九・江右王門四。劉氏に、「福山書院序」がある。末署に、「嘉靖癸丑季秋安成師泉居士劉邦采書」とある。嘉靖三十二（一五五三）年九月のものである。『新安理學先覺會言』所収。　○**歸志**＝帰郷しようという思い。『孟子』公孫丑下篇に、「予然後浩然有歸志。」と見える。

銭緒山　葉氏の家会について

銭緒山の記した葉氏の家会については、王畿にも「書進修会籍」という記録がある。以下、参考までに、その一部を訳出しておく。

葉蓮峰君は、かつて「見一堂銘」を作った。思うに、道を一に見るという意を取ったものだ。君は、平素から経世の志を抱いて、教化を家から始めた。常々その法を示して、親族を和し、親睦を己が任とすることを望んでいた。成就できないまま、寿命が訪れた。公が没してからは、その二子、茂芝と獻芝とが、見一堂を雲荘の麓に建造し、父兄や子侄に相談し、進修会を設立し、一族の人びとを集めて、相互に徳を考え、業を問い、親睦の化を興して、先世の志を継承することを提唱した。**丁巳の年（嘉靖三十六年）の夏、私は、新安福田の会に赴いた。**［葉蓮峰の］二子は、以前から私に従い学んでいたが、またしても雲荘に迎え入れてくれた。進修会に属する長幼若干人を集めて、厳粛な面持ちで堂下で教えを聴講させた。一族を挙げて、これほどまでも義を興し、礼を好んで、望み慕う様は、盛況と言うべきだろう。二子は、そこで、会稽（「会籍」の誤りか）を出してきて、私に、重ねて一言、意見をもとめ、それによって将来に［教えを］示すことを求めた。

蓮峰葉君嘗作見一堂銘、蓋取見道於一之意。君素抱經世之志、而化始於家。嘗欲示法和親、以敦睦爲己任、限於年、未就。公既歿、二子茂芝、獻芝乃作見一堂於雲荘之麓、謀於父兄子侄、倡爲進修會以會一族之人、相與考德而問業、以興敦睦之化、承先世志也。歳丁巳夏、予赴新安福田之會、二子既從予游、復邀入雲荘、集其會中長幼若干人、肅於堂下而聽教焉。舉族興義好禮、顒顒若是、可謂盛矣。二子因出會稽、乞予申訂一言、用示將來。（「書進修会籍」『王

畿集』巻二、四八頁）

［附記］本稿は、平成30年度科学研究費補助金（「基盤研究（B）」）「陽明門下の講学活動と「会語」資料に関する総合的研究」（代表者：小路口聡　課題番号：17H02271）による研究成果の一部である。